# バブルとカサンドラとイノベーション

(9月のごあいさつ)
平成29年9月1日（金）

この夏の暑さは特別で、毎日の暑さがいつまでも続くような気がした。
**バブル**というものもこのようなものではないだろうか。その渦中に居ると、理性では異常だとは感じながら、現状がまだまだ続くと信じるのが人情かもしれない。しかし、信じては間違うことになる。
**ローマ**は、五賢帝の時代に最大の領土を持ち、物質的繁栄もまた頂点を極めた。それは、膨大な奴隷に支えられた自由と平等であり、その原理が行きすぎた結果、**ローマは時代に立ち遅れた。**成功がそれを衰退させる要因となった。

時代に立ち遅れるということは、**変化が制度や国家を崩壊させる**ということである。最近、起きている東芝や富士フイルムHDの企業不祥事、それと同位置の監査法人の問題は、極言すれば、変化に立ち遅れた**「古い体質」**ということになるのではないか。歴史や国家と較べると、はるかに短期的な企業経営においても、変化への対応は企業の繁栄と継続の条件である。
インテルは、かつて**独占的繁栄を続けてきたメモリーチップ事業**から撤退し、**未知数のマイクロプロセッサ事業へ転換**し更なる繁栄を築いた。それは、CEOであったアンディ・グローブが変化の予兆を察知する**カサンドラ**（凶事の予言）によって、新しい発想に根ざした事業へと、**「死の谷を前進する」**ような勇気をもって、ヒト、モノ、カネを大胆に動かした結果であった。

変化に対応するということは、一言で言えば**廃棄**することである。もはや活動を失ったもの、古くなったもの、生産力のなくなったもの、方向の間違っているもの、失敗したもの、そして**成功したもの**は、**組織的に廃棄**していくという方針を持たなければならない。それには体系的、組織的に、すべての事業について、今後とも続けるべきか否かを徹底的に検討し、**廃棄を進める**必要がある。企業も人も、**昨日を捨ててこそ**新たなものを獲得できる。

**イノベーション**とは、自ら変化を作り出すことだという。企業が**生き残り**、組織を**持続する**ためには、変化に対応する必要があるが、その**変化を自ら作り出さねばならない**ということになる。**変化**を**脅威**ではなく、**チャンス**としてとらえる**遺伝子**が企業に備わっていなければならない。変化をコントロールしたり、管理することはできない。できることはその**変化の先頭に立って**、企業の発展に臨むことだけである。